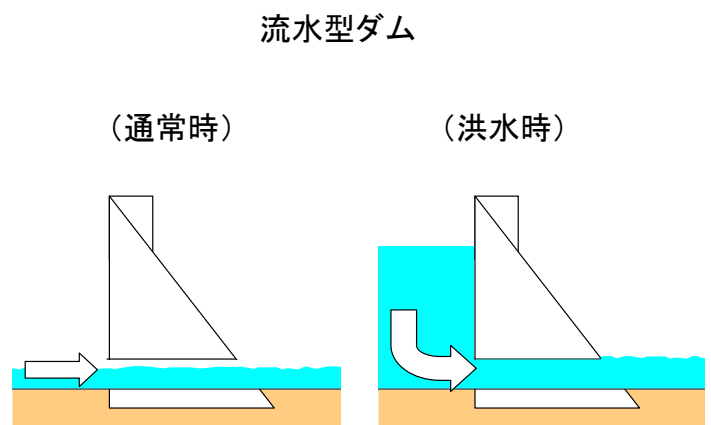
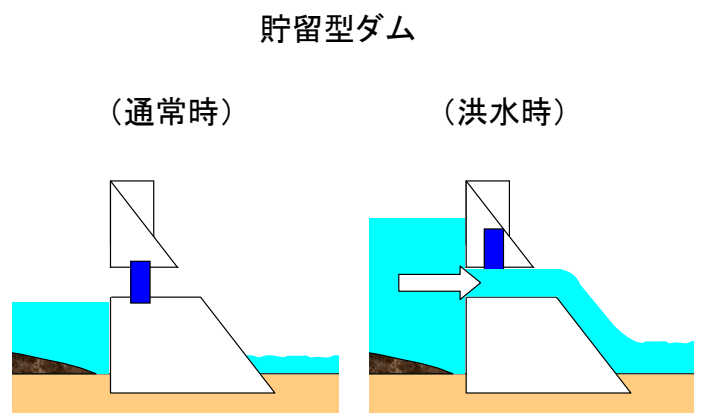


流水型ダムについて

流水型ダムは洪水調節専用のダムで、ダムの持つ様々な機能のうち洪水調節機能に特化した目的で建設される、常時水を貯める必要のないダムの一形態です。

- ダムはその目的や地質等の自然条件に応じて、機能や形態が異なります。
- 稲作が発達してきたわが国では、狭山池・満濃池といった土石を材料とした「ため池」が多く築造されてきました。
- 近代土木技術の発展により、ダムの大型化が可能となり、都市基盤を支える飲料水、工業用水の確保や水力発電等、複数の目的を効率的に一つのダムで達成する多目的ダム(貯留型ダム)の建設が主流となりました。
- 近年、洪水調節専用目的のダムが計画されることに伴い、常時水を貯める必要のないダム(流水型ダム)の実績も見られるようになってきました。



○流水型ダムの特徴

〈治水〉

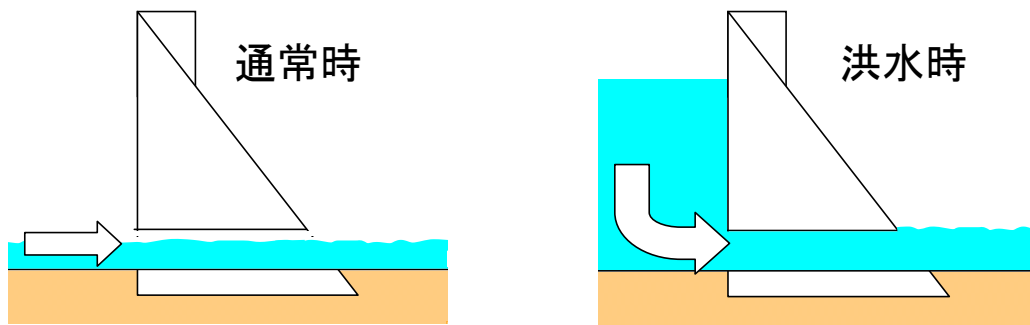
- ・ 洪水時には一時的に洪水を貯留し、下流沿川の洪水被害を軽減します。

〈利水〉

- ・ 利水機能をもたず、通常時水を貯めません。

〈環境〉

- ・ 通常時は水を貯めないため、流入水と同じ水質が維持されます。
- ・ 上流から流れてきた土砂を全て捕捉するのではなく、流水と同時に土砂が流れます。



- 洪水時にはダムのせきあげ効果により、一時的に洪水を貯留し洪水調節を行うため、下流沿川の洪水被害を軽減します。
- 通常時はダムに水を貯めないことや、河床近くに洪水吐や土砂吐を設置することにより、貯水池内でも普通の川の状態が維持され、ダムの上下流における水循環、土砂循環、魚類の移動など、自然に近い物質循環が維持されます。
- 貯水池に堆積する土砂の量が軽減できる(通常は概ね100年間の堆砂量を貯水池内に予め確保)ことにより、ダム堤体をコンパクトにでき、建設コストの縮減が可能となります。
- 洪水吐や土砂吐が流木や土砂で閉塞しないよう、対策が別途必要となります。